

# オニとサル

くわはらりょうこ  
桑原 亮子

山に、ひとりぼっちのオニが住んでいました。もじやもじやの髪の毛からは、りっぱなツノが二本、によつきり見えています。

「あーあ、ひまだなあ」

オニはひとりごとを言いました。窓の外は、きれいな青空。

「泳ぎにでも、いくか」

オニは、パンツを海水パンツにはきかえ、遠くに見える海をめざして、山を駆けおりました。

汗びつしよりで走り続けて、オニはようやく海につきました。熱い砂をふみしめ、オニが水に入ろうとした時です。

「ピビーツ！」

と、すごい笛の音が聞こえました。オニはびつくりして、きよるきよる辺りを見回します。すると、砂浜に立っている見張り台の上から、小さなサルがにらんでいました。

「な、なんだよ」

ていきました。そして、ついに水に入ろうとした瞬間、

「ピビーツ！」

また笛の音です。

オニはうんざりして、見張り台のサルを振り返りました。

「今度は、なんだよ？」

サルは、空を指差して、

「嵐が来そうです。危険なので、海にはまだ入らないでください」と言いました。

「嵐なんか、来ないじゃないか」

オニが口をとがらせた途端、空がみるみる暗くなつて、ざあつと雨が降り出しました。

オニはあわてて、見張り台の下に逃げ込みました。サルも、リュックを背負って見張り台からおりてくると、オニの隣にすわりました。

サルは、リュックからおにぎりを取り出し、かぶりつきます。

「こういうこともあるかと、食べ物を持っています」

お米と海苔のいいにおい！ オニのお腹が、グーッと鳴ります。



と、オニが言うと、サルは汗をふきふき、「こまりますね。海に入る前には、準備体操をしてもらわないと」

と言いました。

「準備体操って、なんだよ」

「はあーあ」

サルは大きなため息をついて、見張り台からするするとおりてきました。そして、砂浜に立つと、

「あち！ あち！」

とさけびながら、両腕を広げて、両足を曲げて、

「私のマネをしてください」

とオニに言いつけました。

しぶしぶ、オニはサルのマネをします。サルが深呼吸すると、オニも深呼吸します。サルが飛びはねると、オニも飛びはねます。

「こうやって準備体操してから海に入らないと、危険なのです」

と、サルはオニに教えました。

「さあ、もういいでしょう。海に入ってください」

サルがそう言ったので、オニは大喜びで、砂浜を走っ

サルは、もぐもぐ食べながら、まんまるな目でオニを見ました。  
「あなた、荷物は？」  
「持っていない」  
とオニ。

「お弁当は？ 水筒は？ タオルは？」  
オニは、首を横に振ります。

「はあーあ」  
サルは大きなため息をついて、リュックからおにぎりを一つ取り出すと、オニに差し出しました。  
「どうぞ」

オニは、  
「わるいな」  
と言うが早いのか、ガブリ！ 一口で食べてしまいました。  
「雨が上がりましたね」  
食べながら、サルが言います。

「ほんとだ」  
いつのまにか、海の上にはまた、青空が広がっていました。

やっと泳げる！ オニは海に向かって走り出しました。そして、水に入ろうとした時――  
ピタッと足を止め、見張り台のサルを振り返りました。

オニは回れ右すると、見張り台の下へ行きました。そして、  
「おれの背中に、乗せてやるよ。一緒に、泳ごうぜ」  
と言いました。サルは、ばあっと嬉しそうな顔になりましたが、  
「結構です。背中から振り落とされたら危険ですから」と断りました。オニは、  
「大丈夫。こういうこともあるかと、ツノを持つてると、頭から生えている、りっぱな二本のツノを指差したのです。」

オニはサルをおぶって、ぎぶぎぶと海に入っていくました。足のつかないところまで来ると、すすい泳ぎ始めます。  
「ああ、気持ちがいい！」  
冷たい波をかきわけながら、オニが言いました。  
サルも、オニの背中に座り、二本のツノをしっかりと持って、  
「ああ、気持ちがいい！」  
とさげびました。

オニはサルを乗せて、青い空の下、どこまでもどこまでも泳いでいきました。

おしま……

「あんたは、泳がないのか？」  
と、オニが尋ねました。  
「私は、泳げないのです」  
汗をふきふき、サルが答えます。  
「はあーあ」  
オニは大きなため息をつきました。  
「この暑いのに、泳がないで、見てるだけなんてな！」



「ビビーツ！」  
「今度は、なんだよ？」  
「くちびるが紫色になっています。水から出て、休憩してください」  
(おしまい)

